

ウチヤマセンニュウの保全は島だけじゃダメ！！

～未確認繁殖島と本土部の葦原の利用状況調査～

大槻恒介・山口典之（長崎大学 大学院 水産・環境科学総合研究科）



はじめに

ウチヤマセンニュウ *Locustella pleskei* は、世界で2,500～10,000羽しかいない危急種（IUCN 2017）で、環境省RLでは絶滅危惧IB類に指定され**個体数の減少が心配**されています。

日本では夏季に繁殖のため伊豆諸島、熊野灘、瀬戸内海、九州周辺の島嶼に飛来します。長崎県では男女群島や阿値賀島での繁殖が確認されていますが、国内最多の1,479の島を有する本県には**未知の繁殖島が多数存在する可能性**があります。さらに、**繁殖を終え、移動・渡り期にどこで何をしているのか**について、**本種の生態は謎**に包まれています。



▲ 長崎で捕獲されたウチヤマセンニュウ

長崎南部での調査状況

- ① 長崎半島の野島や黒島では生息やさえずりの確認がされています。2019年には松島で餌運びの様子が観察されました。これらの島は植生のある小島です。**繁殖環境を有する島は長崎半島だけでも他にも多数ありますが、いまだ踏査されていません。**
- ② 今年7月下旬に西彼杵半島の放棄水田で鳥類標識調査を実施したところ、偶然本種幼鳥1羽を捕獲しました。8月～9月には諫早中央干拓調整池の葦原で行い、**成鳥3羽・幼鳥3羽を捕獲**しました。**その中には換羽中の個体**もいました。繁殖後には本土の葦原に移動し、渡り前の換羽やエネルギー補充を行っていると考えています。つまり、**長崎県本土部の葦原は渡り前の重要な滞在地である可能性**があります。



▲ 諫早中央干拓調整池の広大な葦原の風景



▲ 換羽中の個体（2023/8/21）

目的

1. 長崎半島沿岸部の島嶼での繁殖状況を明らかにする
2. 渡り前の滞在地として本土部の葦原が果たす役割を解明する



繁殖島および本土部の葦原の両面から基礎情報を収集し、ウチヤマセンニュウの適切な保全策を検討する

調査内容

■ 新たな繁殖島の探索とつがい数の調査

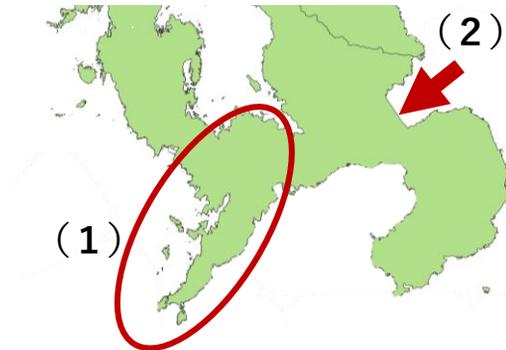
5-7月に長崎半島（1）沿岸の島に渡船し、ブレイバック法を用いて、本種の在不在および安全に配慮し可能な限り縄張り数を調べます。

可能な場合、鳥類標識調査を実施し、抱卵斑指標や総排出孔の突出具合を確かめ、繁殖状況を調べます。

■ 本土部の葦原での鳥類標識調査

7-9月に諫早中央干拓調整池（2）の葦原で鳥類標識調査を実施します。各月に数回調査を行い、夏期に本土の葦原を利用するウチヤマセンニュウが何羽いるのか、どのように個体数が変化するかを調べます。

加えて、換羽状況や脂肪量指標を確認し、本土部の葦原が渡り前の本種にとってどのように役立っているか調べます。例えば、渡り前には丈夫な新羽に換羽し、脂肪を多く蓄えることが考えられます。



▲ 調査地（長崎県南部）



期待される成果

未知の繁殖島を明らかにします。またこれまで知られていなかった、本土部の葦原がウチヤマセンニュウに果たす役割を明らかにします。これらの知見は、本種の**適切な保全策の検討・提案**に役立ちます。

支援金の使途

島に渡船するための瀬渡し代や調査地までの交通費、調査道具の購入費などに充てさせていただきます。

ご支援よろしくおねがいします！